

## 「受精卵診断 男女産み分け」の報道に接して

昨日、今日とマスコミ報道で「受精卵診断 男女産み分け」が、大きく取り上げられています。学会に無申請で、大阪の医師が「受精卵診断」を3ヶ-ス行ったとか。しかも2ヶ-スは、「男女産み分け」が目的だったとか。

こうした報道に接すると、私は単純に、次のようなことを考えてしまいます。

恐らく、この医師、また診断を依頼した当事者等を始め、全世界の人は、ナチスのあの残忍な行為を避難するはず。ナチスは、ユダヤ人というだけで「生命」に優劣をつけたが故の残忍な行為。ナチスの行為は避難するのに、なぜその論理に繋がりがねない「生命」の優劣には無頓着なのでしょうね。障害児だから、遺伝子に問題あるから、まして今回の報道のように男女で優劣を認めていては、自分が誰かから、自らの責任でない属性で比較され優劣をつけられても、かつ、万一抹殺されても非難はできませんよね。それ故、先にHPに記載したように、親であろうが障害のある我が子殺し等のように、「生命」の問題を疎かにした行為には、私は問いを投げかけたくになります。

また、科学技術が発達するという事は、優劣をつける技術を獲得することが目的でないような気がするのですが……。今回の報道の「体外受精」の技術も、永遠の生命の鎖となる「子どもが欲しい」という切なる願いに応える技術として発達してきたはずで、男女産み分けや障害児排除のためとは思いたくないです。

これからは益々科学技術が急速に発達するであろう今の時代だからこそ、「生命現象」に優劣をつけることは、どういう社会になるかをみんなが考え、どういう社会を目標にしたいのかをお互いに確認しておかないといけないのではないかと思います。

「生命現象」は、言うまでもなく、ビッグバンから延々と続いている「永遠の生命の鎖」のほんの一時として、今の我々が存在しているに過ぎないのです。また、今の全世界の人々は、細胞内のミトコンドリアの配列からは、9人の母親からの子孫に過ぎないのです。

それ故に、「永遠の生命」を認識した上で、お互いが「生命現象」の前では家族であり、共に生きようとする生命に囲まれた、一時を共に輝いて生きようとする一人一人の生命でありたいものです。

(2004年02月05日記)